

## 特集 ● 座談会

# 同志社小学校に期待する

### ●出席者 (発言順、敬称略)

- 左巻 健男 (女子大学現代社会学部教授)  
大塚 賢司 (同志社高等学校長)  
石川 明子 (同志社小学校教諭)  
鈴木 直人 (同志社小学校長、大学文学部教授)  
森田 雅憲 (大学企画部長、大学商学部教授)  
奥野 敦史 (毎日新聞京都支局兼科学環境部記者)
- 司会  
水谷 誠 (同志社時報編集委員会委員長、大学神学部教授)



左巻 健男氏

さまき・たけお/1949年生まれ。千葉大学教育学部卒業。75年東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。専門は理科教育、科学・技術教育、環境教育。現在の研究課題は、小学校・中学校・高等学校における理科カリキュラムの内容と編成、理科教育の内容と方法、こどもと地球環境・自然環境。所属学会は日本カリキュラム学会、国際教育学会、日本子ども学会(設立賛同人)、等。主な著書・論文は、『新しい高校化学の教科書』(講談社ブルーバックス、2006年)『理科の基礎・基本おもしろ授業入門』(明治図書出版、2002年)、『理科・数学教育の危機と再生』(共編著、岩波書店、2001年)、『初等・中等理科教育教育に風穴を開ける“もう一つの理科教科書”』(『工学教育』2004年)ほか多数。

ての情報交換なども、もつと小学校との間でできれば面白いなと思っております。司会●そうですね。法人内にせっかく小学校教員を養成する学科があるので、これから交流が深まっていくのではないかと思います。現在の日本の教育事情を念頭に置いていただいて、初等教育に携わろうとする学生の教育をしておられる左巻先生ご自身の教育観、小学校観をお聞かせいただけますか。

左巻●今の公立小学校を見るかぎり、教員自身がカリキュラム作りや授業作りはするけれど、その前段階にある、どんなふうに子どもを育てるのかという学校全体のカリキュラムは上からの押し付けになつてしまっているんですね。そのお仕着せがある程度良いものであれば日本全体の教育も良い方向へ進むのですが、残念ながらかなり着せの面がある。その、ずさんなお仕着せの中で、日本の教師はかなり優秀ですから何とかうまくやって結果を出しているというのが現状だと思います。

「学力問題にしても今まで何度も問題になつて、そのたびに学習指導要領が変えられたり、それを元に新しい理念が作られたりしてきました。しかし、元となる学習指導要領が複雑なので、社会の変化に対応できないものが作り上げられてしまった。私はそれが一番大きな問題だと思います。」

「学力問題にしても今まで何度も問題になつて、そのたびに学習指導要領が変えられたり、それを元に新しい理念が作られたりしてきました。しかし、元となる学習指導要領が複雑なので、社会の変化に対応できないものが作り上げられてしまった。私はそれが一番大きな問題だと思います。」

既成の枠組みから解放され、人間としての総合力を涵養する初等教育を

司会●本日は大きく分けて2つのテーマについてお話しいただきます。第1点は日本の小学校、初等教育を取り巻く現状、課題などについての意見交換であり、第2点は今春開校しました同志社小学校の目指す教育内容、同志社小学校への期待、抱負などです。存分に語り合ってください。よろしくお願いいたします。

左巻●私は3年前に同志社女子大学に來まして、現代子ども学科で理科教育と環境教育を担当しています。同志社小学校はまだ実際には拝見していませんが、世の中に対して何か意味のあること、現在の教育界に良い影響を与えるようなことをしてくれたいと思つて見えています。一人ひとりがスターにならなくていいから、学校集団として良い方向へ行つていただきたい。私も現代子ども学科には小学校教育の優秀な専門家が揃つてい



大塚 賢司氏

おつか・けんじ／1953年愛知県名古屋生まれ。大学では哲学を専攻。84年度から同志社高等学校で教鞭をとる。社会科学の倫理（2年生必修科目）のほか、3年生の選択科目「現代思想特論」を担当。95年当時の3年生の授業実践を『オウム真理教事件を哲学する』（地歴社、1997年）として発刊した。2001年度より教頭、05年度より校長、現在に至る。

さいという規制もある。ここ10年、20年とそういう傾向が強まってきて、カリキュラムが自由に組みにくいというのが現状です。もちろんプラスアルファの工夫をしている部分はいくらでもあります。教科書を全く使わない選択科目は、同志社高校にはたくさんあります。

私が感じるのは小学校、中学校、高校、大学と連続して捉えた場合、大学の教育は、初等教育や中等教育とは異質なんです。大学と高校の間で質的には一度流れが切れている。高校は教育半分、学園への導入半分ですが、やはり基本は教育だと思えます。そこへ週5日制やゆとりの時間などが導入されて中学以下の学校

で授業が削減されると、一番のしわ寄せは高校に来るんです。けれど今の文部科学省の方針は、レベルが低くても卒業させるといものになっていきます。非常に敷居が低い。生徒たちの質は確かに変わってきています。継続性の必要な反復が足りないことは高校に入ってきた瞬間から分かる。こうして、中学校からは学力が足りないままどんどん高校へ上がって

くるのに、大学入試のレベルは変わっていないから大変です。高大連携とよく言われますが、実はこの問題は並大抵の努力では解決できないものを含んでいると思います。

石川●同志社小学校ではカリキュラムが

いう産児制限が行われていたことも知らずに、自分たちがその言葉を使っていたことを知って大変ショックを受けました。そのことによって、命とは「あつて当たり前なもの」ではないのだということと、一つの言葉にも深い意味があることを子どもは学ばなければ。そういうことにふれさせ、目を向けさせていきたいと思っています。現在の教育界では「間引き」という言葉はあまり使わないことになっていきますけれど、同僚に聞くと「疎（うろ）抜き」という言葉があるそうです。

たところで教えたいという夢やイメージをおもちですか。

石川●この小学校はどんな学校になっていくのだろうということを調べていくうちに、漠然とですが、そういうイメージをもつようになりました。

鈴木●間引きの意味を教えるとか、そういうことは、残念ながら今の小学校では求められていないんですね。多くの先生方はやりたいと思っているけれど、現実にはそういうことを教えていると授業が遅れる、テストに間に合わない、塾に遅れるなどという問題が現場で起こる。それは先ほど石川先生がおっしゃったように、受験が後に控えているからです。そ

うことは、残念ながら今の小学校では求められていないんですね。多くの先生方はやりたいと思っているけれど、現実にはそういうことを教えていると授業が遅れる、テストに間に合わない、塾に遅れるなどという問題が現場で起こる。それは先ほど石川先生がおっしゃったように、受験が後に控えているからです。そ



石川 明子氏

いしかわ・あきこ／1989年千葉大学教育学部小学校教員養成課程教育学選修及び中学校教員養成課程英語科専攻卒業。埼玉県、神奈川県のキリスト教小学校教諭を経て、2006年4月より同志社小学校に勤務。作文、歌唱、ハンドベル演奏、絵画、リズムダンス、新聞作成を通して思いを伝える表現活動指導に重点的に取り組んできた。現在は、学校を創り上げるとは具体的に何をどうすることなのか、同僚と模索しつつ、学級では平成の自由人になって欲しい、なっしていきたいと願いながら教育活動を行っている。

まだ完全なものにはでき上がっていませんが、日本の小学生全体を考えたり、私がかれまでの経験で感じたりした中で、やはり中学受験のことを考えてしまいます。たとえば、高学年の社会では歴史のこぼれ話などが大変面白いのに、受験を考えるとそういう話はカットしないといけない。そういう現実には辛かったですね。公立小学校に勤める教師仲間がよく言うのは、受験のためにどうしても子どもが塾へ行ってしまうということです。

石川●子どもがいずれ一人になった時、一人でも生きていけるあらゆる力をつけさせたいですね。それは高学年になってからではなく、1年生に対しても同様です。たとえば、今1年生はアサガオの種を蒔いて栽培していますが、先日子どもたちに「間引き」の話をしたんですね。そこで子どもたちは双葉や本葉はこんな形をしているなどという知識を得るのではなく、かつて日本の農村では間引きと

のために学校としてはそこに向かっていかざるをえないし、受験で結果を出さないと学校が成り立たない、あるいは各方面からクレームが湧いてしまうという現実が多分にあるのではないのでしょうか。

では、同志社小学校では何ができるかというと、一つの要素として受験のための学力をそれほど問題にする必要はないということですね。誤解していただきたいのは、これは学力を問題にしないという意味ではありません。狭い意味での受験学力は問題にする気はないということです。ただ、本当の意味での学力はつけていく必要があります。それは人間としての総合力であり、もちろん学科の学力も必要でしょう。ただ、急いで詰め込む必要はどこにもありません。ゆっくり学べばいい。そして中学校、高校に入ってから、何かに行き詰った時、子どもたちは自分で考えるということができるようにしたい。そうなった時に本当の力というものが出てくるのではないかと。今ほどにかく覚えるという教育、試験ができればいいという教育が、あまりにも横行し過ぎていきます。それに対して、我々は何か



鈴木 直人氏

すずき・なおと／1947年生まれ。71年同志社大学文学部卒業。73年同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。74年同研究科博士課程中退。81年医学博士（京都府立医科大学）。専門は感情心理学。現在の研究課題は、ポジティブ感情とその機能、感情表出と生理反応、空間的枠組みが直立姿勢に及ぼす影響。学校法人同志社理事・評議員、同志社小学校長、キリスト教文化センター所長。所属学会は日本心理学会理事、日本健康心理学会理事、日本感情心理学会理事、関西心理学会常任理事、等。  
主な著書・論文は「感情心理学への招待」（サイエンス社、2001年）、「学ぶ、教える、かかわる」（共著、北大路書房、1995年）、「感情の生理心理学的アプローチ」（「基礎心理学研究」2005年）ほか多数。

違うことを出せないか、同志社だからこ  
のできることを打ち出せないかと考えて  
います。

### 自由に機能できる 教師集団づくりの必要性

左巻 ● 校長先生のお話にもあつたよう  
に、本物を教え、考えるということがと  
ても重要ですね。といつても、何ら手が  
かりのない真空地帯では考えることがで  
きません。考えるためには、そこに非常  
に良質な知識が必要になります。それが  
まさに、本物と関わりながら身につける、  
本物の知識ですよ。そういう知識を6

年間のさまざまな教科教育活動の中でど  
のように育てていくのか、そのような考  
え方を教師集団として持っている、ある  
いは将来的に持とうとしているのか。今  
後はそれが非常に重要になると思います。  
鈴木 ● 同志社小学校ではあまり会議を行  
わず、職員会議も月1回しかしません。  
それよりも教員同士で授業を見学し合っ  
て、討論するという研修会をよく開いて  
います。これも、左巻先生の言われたよ  
うな活動の一つだと思えます。他の学校  
で良い授業をやっているという話を聞け  
ば、見学に行く先生もおられる。それを  
我々の授業にフィードバックさせる。先  
生方の取り組みは始まったばかりです

えているかどうかは実は見えてこない。  
そういう授業はたいしてだめです。子ど  
もたちが本当に学んでいる時は、静かに  
小声で友だちと相談しながら、新しい課  
題に取り組むなどしていますよ。

司会 ● 学校の中の教師集団がどんな文化  
を形づくるかということが、直接的に教  
育に反映されるということですね。教師  
としてさらに感性豊かに、幅を広げよう  
として育つていくための方策は何かあり  
ますか。

左巻 ● 私が今まで最も長く勤めていた東  
京大学教育学部附属中・高校では今、  
「学びの共同体」という考え方を提唱し  
て校内挙げて取り組んでいます。年に何

十回と研修会を開いて、いつも子どもの  
姿を見ながら研修会を進めるということ  
をしています。僕もその取り組みに、京  
都から着目しているところです。  
大塚 ● 今は全国的に改革競争の時代です  
が、同志社高校ではその種の組織的な取  
り組みはしていません。むしろ先ほど出  
ました同僚性の観点から考えると、そう  
いうことが組織としてではなく、日常的  
に行われることの方が大事ではないかと  
思います。研修も大事だと思いますが、  
自然発生的に行われることが重要なので  
はないでしょうか。そのためには、教師  
たちのそのような活動を圧迫しないよう  
な環境づくりが大切です。

が、将来的にはほとんどん身についてい  
くのではないかと思っています。

左巻 ● いま教育学の世界では「同僚性」  
という言葉をよく聞きます。自分の授業  
はいつでも公開して教師仲間を検討して  
もらい、授業の改善に役立てるとい  
う仕組みですね。しかし、従来の授業研究会  
では教師の話や板書の内容など、教師の  
していることがテーマの中心でした。学  
校というのは、教師の言うとおりに子ど  
もが動いている場ではないわけです。必  
要なのは、子どもたちがどういふふう  
に学習に集中しているか、どのように頭を  
働かせて、協同の学びを作っているのか  
をよく見ることに。そういう子どもの学び  
に着目した研修会であれば、僕は年に何  
十回でもやった方がいいと思う。同志社  
小学校もそういうことができる教師集団  
を抱えているのであれば、将来に期待で  
きるかなと。

公立学校でもよく授業参観をしていま  
すが、低レベルな場合が多いんですね。  
子どもが大声を出して騒ぎながら手を上  
げていると表面上は活発な授業をしてい  
るように見えますが、子どもが本当に考

左巻 ● 普通はそういう研修会を内部的に  
行ったとしても、教科ごとに行うことが  
多い。しかし、本来は教科を越えて内容  
を見た方がいいので、学年会みたいなも  
のが母体となり、そういう活動のコアと  
なることが必要になってくるでしょうね。

鈴木 ● 同志社小学校が目ざしているの  
は、常に子どもと向き合える集団である  
ことです。教員だけでなく職員にも、子  
どもと接し、向き合い、子どもを大事に  
してくださいとお願いしています。そう  
いう教師集団でありたいと思っていま  
す。

左巻 ● 子どもと向き合えることを前提と  
して、さらに上に行くとしたら、「子ど  
もがどう学ぶか」ということに関する専  
門家であることが非常に重要です。

鈴木 ● そうですね、次の段階では当然そ  
れが必要になってきます。

### 学ぶこと自体に 喜びを感じられる学校づくりを

司会 ● 大変興味深いお話が出ました。と  
ころで、同志社小学校で取り組んでいる



森田 雅憲氏

もりた・まさのり／1950年生まれ。75  
年神戸大学卒業。77年神戸大学大学院  
経済学研究科博士前期課程修了、80年同  
研究科博士後期課程中退。専門は理論経済  
学。現在の研究課題は、制度と個人の相  
関的支持についての研究、ハイエクの社  
会理論の研究、商品の制度化の過程の研  
究など。大学企画部長。所属学会は経済  
社会学会理事、日本経済学会、日本記号  
学会、進化経済学会、等。  
主な著書・論文は『入門経済学（オイコ  
ノミカ）』（ミネルヴァ書房、2004年）、  
『ランドマーク商品の研究(2)』（共著、  
同文館出版、2006年）、『経済学の基礎』  
（共著、三和書房、2001年）、『移行期  
ハイエクの方法論について』（『同志社学  
報』2006年）ほか多数。



奥野 敦史氏

おくの・あつし/1971年生まれ。93年3月同志社大学法学部法律学科卒業。ゼミで故・安枝英伸教授（労働法）の指導を受けた。

卒業後、毎日新聞社に入社。岡山支局、奈良支局、大阪本社科学環境部を経て、04年4月から京都支局兼科学環境部。94年から現在まで大学、研究機関を取材対象とし、主に医学・医療、生命科学、環境問題、考古学などに関する記事を執筆している。

著書に「神への挑戦—科学でヒトを創造する」(共著、毎日新聞社、2002年)。

ことは、ゆとり教育とはどう違うのでしょうか。

森田●私が大学にいて最近感じるのは、学生たちは資格志向か無気力かの、どちらかなんですね。資格志向の学生はダブルスクールや図書館に通うなどして、ものすごく勉強している。かたや無気力な学生は、授業に來ても携帯メールをカチカチ打っている。この現象の根は一緒です。目的を見つけるとがむしろに頑張りますが、見つからないと何をしていたのか分からないというタイプの大学生が多い。というのは、小さい時から「何々のための勉強」しかやってきていないからです。中間テストのための勉強、受験

のための勉強。逆に言えば目的がないのも勉強しないという構図の中で小・中・高校と学んで来るので、その結果として、大学に入ったら勉強する必要がなくなったり、何をやっていいか分からなくなったりする。だから真面目な学生は勉強しない自分に苛立ち、資格を設定してそれに向かって猛勉強するということになります。

しかし、大学の勉強とは本質的にそのようなものではない。「何々のため」にする勉強は大学でももう捨てないといけないのに、それが捨てられない。習い性になってしまっている学生が多いんですね。大学とは、学問すること自体の喜び

ではなく、セットで捉えたい。

生徒も教師も生き生きできることが、とても大切です。公立小学校では、1週間の授業計画を非常に緻密に作って管理職に提出し、その都度指示を受けるそうですね。それを作るだけですごい労力が必要そうですね。そのために生徒と接する時間が取れず、先生方はかなり疲れてしまっているという現実を聞きます。同志社はそうであってほしくない。私の高校では授業プラン作りは先生の自主性に任せていて、教材もいろいろと生活の現場から拾ってくるができます。私も資料集は使いますが、教科書はほとんど使いません。そういうことは管理しない方が教員は生き生きできますし、エネルギーも発揮できると思っています。この問題は今の日本の、特に初等教育における根深い病巣ではないでしょうか。

## 「公立の私学化」と「私学同志社」の一貫教育

奥野●ここ数年、あちらこちらの大学でキャリア型の教育が続出していますね。

IT教育や英語教育などに力を入れてくる。この種の発表があるたびに「専門学校みたいですね」と言いたくなるくらいです。「大学とはそういう場ではないのでしょうけれど」と、レクチャーなさった先生も記者会見の後で自嘲的におっしゃるんですが、学生のニーズなので仕方なくやっていると言われる。これは、私が受験戦争を経験した頃、小・中・高校が受験予備校化していった流れが、いま大学にも押し寄せているようにも見えますね。

中学時代、私は同志社高校に入るために受験勉強をしました。公立中学の授業だけではとても対応できないので、学習塾に通いましたが、無事、同志社高校に入って何に一番驚いたかということ、まるで授業が違う、ということなんです。外国人の先生もいるし、3年生になると「特論」というクラスがあり、ほとんど大学のゼミみたいな学問もできた。実は私は、国立大学の受験もしたのですが、そのための勉強も同志社高校でしていたのです。一つくらいは自分の好きな学問がしたいと思つて特論を受けながら、受

に目覚める場であるべきです。私が一貫教育に期待するのは、そこです。中学・高校と受験から解放され、目的のために勉強するのではなく、考えること自体を楽しむタイプの人間を育ててほしいと思います。それが意味、真のゆとり教育ではないでしょうか。

鈴木●ゆとり教育とかではなく、小学校はすべてが総合学習の場だと思えます。算数、国語を勉強していても遊びをしても、すべてが学びではないかと。これは中学や高校とは少し事情が違います。何をしても、いろんな学ぶ場所があるのが小学校ではないでしょうか。子ども同士の接触のある場は、たとえそれが喧嘩であつてもすべて学びなんです。総合学習は常にやっているということです。

大塚●「ゆとり」は「詰め込み」の対極として言われていますが、この二元論は私としてはちょっと良くないと思います。多様なことをやっても、知識というのは必要なんです。楽しみながら知識がつけば最高ですから、この「ゆとり」と「詰め込み」は対立するものとしてで

験勉強もできた。医学部を目ざす友人もあまり焦っていないくて、「ここは変な学校やなあ」と思っていました。でも今思えば、そういう勉強ができるところに「同志社らしさ」があるように思えます。

振り返つて、今の小学校事情を見ると、京都の公立にも小・中一貫教育を採る学校が始めました。京都市立御所南小学校などは児童の4割が私立中学へ進学するといえます。また、学校選択制を導入した東京都では、公立の小・中学校でも人気校、不人気校が明確に出始めています。これには公立校の「私学化」「受験校化」が進んできていることを感じます。

一方で、もともとの私学はどうなっているかというと、たとえば学園小学校、西武学園文理小学校など、関東に最近できたいくつかの私立小学校や、中等教育ではトヨタなどが出資した名古屋の海洋学園中高校など多くの学校が、受験を念頭に置いた「エリート校」の性格を打ち出しています。同志社小学校とよく比較される立命館小学校も同じタイプだと思います。

でも公立、私立を問わず、受験校化、

エリート校化していくことが果たして良いことなのかどうか。受験がないことによつて幅広い学びができるチャンスを得るということは、小中高を問わず非常に大事なんじゃないかと思えます。現在の流れの中で、大学・大学院までもつている同志社のような学校は、ぜひとも受験対策に特化しなくてもいい学校であつてほしいと思つています。私自身が感じた「同志社らしさ」を失つて欲しくない、とも言えるかもしれません。

**森田**●私も公立の私学化には関心がありません。小・中一貫とか中・高一貫教育というのは私学の専売特許のように思つてきましたが、どうやら最近はそのではないらしい。ただ、私学の一貫教育と公立のそれとは、根本的なところで違つて私学は思ひます。たとえば公立学校が一つの宗教に依拠して教育できるかというところ、それはできません。あくまで公教育なので、パブリックな理念しか掲げられない。

ところが私学には長い伝統の中に綿々と貫かれてきた理念がある。特に同志社には、しっかりと教育理念があります。それが一貫されていることが大事なんで

くのです。彼らは発想が自由だな、何か違ふなど。違つたカルチャーに感化される。一方、小学校から同志社に入つていた生徒たちも、これが自分たちの世界だと思つていたら何か違ふ。外部から来た生徒たちはまた違ふカルチャーを持っていることに気づいて、そこでまた自分の考え方が正しいかどうかを吟味していくでしょう。中学に入るたび、高校、大学に入るたびにそういう機会があり、そうやって本当の同志社精神というのは涵養されていくのでしょうか、色々な人がそれに影響されていくのだと思ひます。精神的な意味では、これが本当の一貫教育だと私は思ひます。

**大塚**●高校でも、まさにそういうことが起こつていると思ひます。同志社高校では1クラス45人のうち、10人は受験で入つてきた人。そこである意味、カルチャーショックが起こるんですね。最初は無理に溶け込もうとしたり反発したりしますが、3年間を通じて互いが刺激になつて成長していきます。

**鈴木**●融合していく。

**大塚**●そうですね。ですから単一色でや

す。学ぶ場所が一貫しているだけで、果たして理念が貫徹されているのかというと、公教育ではなかなかできていないのではないのでしょうか。そういう意味で、真の一貫教育というのは、やはり私学でこそできると言えてでしょう。幼稚園、初等教育という人間形成において最も基本となる大切な時期に、徳育・感性をしっかりと育てる教育こそが、一貫教育のあべき姿だと私は考えています。そういう意味で、公立学校がいくら一貫教育を行つても、同志社は負けないと思ひますね。徳育や感性を育てる必要がなぜあるのかというと、先ほど大塚先生がおっしゃつたように、楽しみながら知識を身につけていくのが理想だと私も思ひます。「楽しめる自分」を、まずつくらねばならない。自然に対して感動できる自分であつたり、友だちの悲しみに共感できる自分であつたりと、心の豊かさは幼稚園、小学校で育てるしかないのです。こんなことを言うとな一般人試で同志社大学に入つてくる学生には申し訳ないのですが、大学の4年間だけで、キリスト教主義、国際主義、自由主義がどこまで身につく

つてしまうよりも、多様性があつた方がいいと思ひます。同志社高校は学内校の中でも異色なんです。大学進学の際も外部受験する生徒がいいます。その生徒たちも、他の生徒たちの刺激になつていんじゃないでしょうか。医学部を受けるなんて、あんなに努力をする人もいんだとか(笑)。その刺激が、推薦で入つた生徒たちを引き上げることもつながらるのではないと思ひます。

**森田**●大塚先生が今、言われたことは大学でも起こつています。一般受験で入つてきた学生に比べて、内部から来た学生は全然違ふ。語学がちよつと見劣りする学生などありますが、発想の豊かさ、人間の幅の広さから見ると、内部高校から進学してきた学生の方が、私にとつては魅力的です。そういう学生たちと一般入試で来た学生たちがお互いに融合するといふ、良い形があるのではないのでしょうか。

**司会**●左巻先生は同志社に来られる以前は公立校におられたんですね。そのあたり比較して、いかがですか。

**左巻**●東京大学教育学部附属高校からは

のだらうかと。もちろん4年間、そういう気風や精神の中に身を置くことによつて、かなりのものは体得していくと思ひますが、それ以上に幼稚園からずっと受け続けた子どもには、素晴らしいものがあると思ひます。社会に出る時も、そこそ良心が全身に充満した人間として羽ばたいていけるのではないのでしょうか。そんな理想的なことばかり考えているのですが(笑)。

**鈴木**●今の森田先生のお話を少し補充すれば、小学校では子どもたちは教員の言うことを非常に素直に聞いてくれますね。ところが中学・高校になると、当然物事を批判的に見るようになります。建学の精神だ、同志社精神だ、覚えなさいと言つても「なぜ?」ということになる。自分が育つた環境の中で身につけたもの、いいのかわいのか、今度は違ふ立場で見ようとし始める。そして大学に入ると、その見方が本物になる。それが本物の精神ということですよ。

では一般人試で外部から同志社へ来る学生・生徒はどうかというところ、もともと同志社で育つた生徒たちに感化されてい

ほとんどが大学に進学しますが、東大附属でありながら東大には入れない。受験偏差値的には低いレベルの学校でした。ところが彼らが大学でゼミなどに入ると、積極的、意欲的でリーダーシップを

発揮する場面が多い。ゼミで目立つ存在になつて先生方から一目置かれていようです。それはやはり中高一貫教育の中で、教師と生徒が独特の人間観をもつて教育に取り組んできた結果だと思ひます。受験対策や補習はしない、そういうことは自分で勝手にすることだということとで自主性に任せる。そして、最後の1

年半は卒論を書かせます。それで、推薦入試やAO入試などで結構他の大学に入つていきます。6年間遊んでしまつてだめになつてしまう生徒もいますが、多くの生徒は6年間で自分をつくり、能力を高めていきますよ。途中で外部から生徒を入れなくても、こういうことができるんですね。私も同志社小学校に期待するとしたら、6年間教師と一緒に子どもたちがこんなふうになりました、というところを見たいですね。ちゃんと感動できる心、本質を見る目を養うことができ

ばすごいなと思っっています。  
森田●大学に来てはまだ「伸びしろ」があるということですね。

## 一貫教育における「均一化」への懸念を考える

奥野●つい先日大学のゼミの同窓会あったんですが、最近では同志社の卒業生が生まれすぎ、同志社小学校の話題になります。私たちはそろそろ自分の子どもが幼稚園や小学校に入るという世代ですが、私の周囲では我が子を同志社小学校に入りたい人、入れないという人の割合が半々なんですね。「入れない」という人は、小学生の間は似たような階層の人が集まった環境ではなく、多様な子どもたちのいる環境で育てたいという意見が多いのです。

先日ある雑誌に、灘中・高校の教頭先生のコメントが出ていました。政界、経済界、学界などに多くの人材を送り込んでいる学校ですが、その先生は「一國を動かすほどのリーダーを育てるのは私学では難しい」と述べておられます。一定れるような人には育たないと思っっています。

司会●森田先生がおっしゃったように、今は「何々のため」という意識で勉強する人が多いですね。私は神学部にいますか、そこで宗教を学んで何の役に立つのか、という問いかけが非常に多いわけです。しかし宗教とは本来、そこにいるのが楽しいとか嬉しいとか充実しているとか、そういうものなんですね。そういう意味で、同志社らしい発想として、忘れてはいけないものがあります。新島の言葉に「人ひとりは大切である」というのがあります。そういう発想を十分生かすことができれば、エリート主義には陥らないと思います。教育として見ると、同志社小学校は一つのまとまりとして他の子どもたちから分けられているとは思いますが、どういう育み方が為されるかが今後非常に大切になってきます。

鈴木●昔は「福祉の同志社」と言われていた時代がありました。現在でも大学のレベルで言えば、ハード面では福祉に關して抜群の設備をそなえている。「人ひとりは大切」という新島の言葉は、今も

の学費が払えて、厳しい受験をかくぐつてきた灘中・高では、わりと均一化した生徒が揃っている。国を動かす人物になるのであれば、もつと多種多様な世界を見て、それを受け入れられる素養を養わねばという意味です。だから、灘中・高も改革の必要を感じているということですね。

鈴木●小泉首相に聞かさなければ(笑)。  
奥野●灘中・高では養護学校との交流などをを行い、奨学金制度も充実させているそうです。個人的な体験談になりますが、私の通った小学校にも障がいを持つクラスメイトがいました。1年生の時、その友達に2年生にいじめられて泣いていたことがあるんです。その時、クラスは団結して2年生の教室に抗議をしに行きました。1年生にとつて2年生はすこく年上のお兄さん、つて感じですよ。そこに「抗議に行く」という大変な決心をしたからでしょうか、今でも、すこく鮮明に記憶に残っています。

私の周囲では、OBを含めて男親に「小学校は地元公立に」という意見が多い。その後、本人が望めば中学校は同色々などところで生きていると思っいます。JR福知山線の事故の時も、何も呼びかけないのに翌日は1500人も人が集まってくれました。あるとき私は、同志社も捨てたものじゃないと思っいました。同志社の精神とは、そういうところにあるのではないと思っいます。もう一つは、若いうちは同志社を嫌う卒業生が多いですね。ところが50、60歳になると帰ってくる人が多い。孫ぐらいになるとまた同志社に入りたいと言う(笑)。これはどういうことなのでしょう。変な学校ですね。

奥野●僕自身の観察では、内部生はそんなことはあまりないと思っいます。みな同志社が好きですよ。同志社では「好きになること」を強いていないからではないでしょうか。

鈴木●私の聞くかぎりでは、小学校開設については、たぶん中・高校の卒業生が一番批判的なのではないですか。ただ逆に言うと、それだけ同志社に注目し期待してくれているのだと思っいます。

左巻●でも、かなり意識的に教育しないと、やはり6年間お嬢さん、お坊ちゃん

志社へ行かせてやりたいと言う。小さいうちから私学の均一化された中で教育を受けて、エリート意識の強い人になって欲しくないと言っいます。障がいのある友人の話は一例ですが、家庭の状況もさまざまという環境で、小学生は育てたいという考えの人も多い。また、私も大学に入った時、「内部生」と揶揄というか、批判的ニュアンスで言われた実体験がありますし、幼稚舎からずっと慶應義塾の友人も「エスカレーター組」とからかわれたそうです。大学から慶応に入った別の友人は「エスカレーター組は嫌な奴が多い」と言っつてはばかりません。12年後、同志社小学校OBが大学に入った時、同じことを言われるようになって欲しくありません。そうはならないと思っいますが、いま同志社小学校に入れたくないと言っつている親たちは、なんとなく皮膚感覚でそういう心配もしているのではないのでしょうか。

鈴木●同志社には、ベースにキリスト教があります。それを小学校から教えた場合、個人差があるでしょうから一概には言えませんが、そんなにやなやつと言われない集団として育つてしまふ危険性は高いと思っいますよ。他の集団と一線を画してしまふ。そのまま大学を出て社会に出たら、当人たちは何も意識しなくても、鼻持ちならない人になってしまふ可能性もあります。その問題をキリスト教主義教育によってどこまでクリアできるのか。学校集団として、一貫教育として、そうならないような仕掛けが同志社にはできるのでしょうか。

森田●人間には色々な人がいるんだというのを小さい頃から教えるという意味で、子どもたちにとつて環境の多様性から学ぶものは確かにあるでしょう。ただし、子どもたちの持つている多様性をい形ですくい取る公教育の制度が、今あるのかどうか。たとえば多様な学力の子どもたちを教える際、公平性を重視するあまり、適当なレベルに合わせようとして伸びる子を伸ばせないと問題があります。本来はのびのびと育ててあげれば、そのように育つだろうに、たとえば受験を意識するあたりから鬱屈したものを抱えるようになる子もいます。多様性に富む環境では、そういう負の経験も数

多くあるんですね。

**鈴木**●だからといって習熟度別授業が本当にいいのかどうか。これがよく吟味されていないのが問題です。

**森田**●確かに私学には、型にはまった人間を育てていく危険性があると思います。では、どうすればいいのか。一つには、学力一辺倒の入試をせず、他の多様な側面から子どもを評価する。たとえば非常に絵のうまい子がいたら、少々算数ができなくてもいいというような入試をして、多様性を確保する方法があります。

## 同志社小学校教育への期待

**司会**●理念を実質的にどこかで具体化する環境づくりは、押し付けでは当然ありえないし、そういう風土を育てる工夫が必要でしょうね。いま公立小学校でも一貫教育を行うところが出てきて、私立大学も小学校をどんどん作っています。そういうところではキャリア教育的な視点が、どうしてもニーズとして出てきている。しかし今までのお話では、それ以外のところに教育というものはあるのだと

教育とは、そういう目に見える仕掛けにあるのではなく、それを地道に支える活動にあるのだと思います。大学入試の時にしか使わなかった知識は、それで剥げ落ちる。ところが自然界や日常生活の中で意識的に身につけていった知識は、やはり違いますよ。今は知識の活用が弱すぎます。小学校、中学校の教育では「教えて、それで終わり」。しかし知識を教えて、あとは自分で勝手に使いなさいというのではなく、使い方を教えてあげないと。知識を使うことによって知的な面白さがちゃんと分かるようになるまで導いてあげないといいけません。それも「使える知識」、人生を豊かに生きるために使える知識を教える必要があります。

**鈴木**●そのへんは小学校の先生に教えられましたね。大学では知識を教えればい

いう主旨でした。それをさらに展開するために、どんなことに目を向けていく必要がありますか。

**鈴木**●多くの私立小学校を見学しに行くと、いわゆる伝統校にはさまざまな仕掛けがありますね。山の中に研修センターがあったり、学内に仕掛けがあったり。同志社小学校でもそういうものが作れないかと。子どもたちの隠れ家になっている「デン」はまさに物理的な仕掛けの一つですが、ソフト面での仕掛けも何かできないかと思っています。先日、中学の先生からサジェスチョンを受けたのです



創造性を育む「デン」。  
共有スペースや各教室に設けられている。

い、あとは自分でやりなさい、我々はそれを援助するだけだよという風潮が多分にあるのですが、発見させていくというのは小学校の先生に教えられました。ただし教えて、発見させた後どうするのか、ということも子どもに気づかせないと意味がありませんけれど。

**左巻**●同志社小学校の場合は、キリスト教主義をうまく教えるための工夫が何か為されているのかということが肝心ですね。国際主義というとすぐに英語教育の話になりますが、そうではなくて真の国際人を育てるために、同志社では小学校時代からどんな学習をしているのでしょうか。このように、同志社小学校の理念と結びついたカリキュラムや仕掛けとして学習が具体化する時に、どんなことを考えているのかを知りたいですね。

**大塚**●高校のことを言いますと、最近の高校ではコース制を採っているところが大変多く、目的のためなら手段を選ばない学校が非常に多いですね。理科系の生徒ならもう国語はそんなに勉強しなくていいとか、文系の生徒なら英語ばかりやっていたいとか。先ほど公立の私学化

が、子どもの発明・発見に対して学校から証明書を出すということも考えています。そして既に認められたものを他の子どもが使う時は、許可を得てからにする。知的財産の大切さを学ぶことにもなります。自分の創造性だけでなく、他者の創造したもの、アイデア、考え方を大切にすることを教えることになる。そういうソフト面の仕掛けを考えていこうと思っています。

**左巻**●もしも私が小学校1、2年生を指導するとしたら「走りもの、変わりだね」をしたいですね。これは自然界で一番早いもの、変わっているものを見つけてくるんです。一番最初に咲いた花を見つけてクラスで発表する。あるいは、ちょっと不思議な形をしている花を探して発表する。いつも自然界に興味をもち、何かを見つけられるような感性を育てるわけです。それを毎日行う。先生がサジェスチョンを与え、子どもたちが持続することが大事ですね。それを1年間続けられれば、子どもの見る目が変わってきます。

同志社小学校でも何かそういう仕掛けをしていただければと思います。本当の

という話が出ましたが、私学も二極化してきたように思います。受験などに特化した私学と、多様なことをバランスよく幅広くしていく私学への二極化です。同志社は後者でありたいと私は思っています。「一人ひとりが大切」という新島の精神を考える時、それを感受性というか感性のレベルで涵養するのが小学校、それを引き継いで中学校に上がり、そこで思春期を迎えて高校生活を過ごし、大学へ送る。これが一貫教育ではないかと考えます。戦略的なことを言えば、それが私学としての同志社のポイントではないかと思っています。

**左巻**●現在同志社小学校の生徒数は90人ですね。わずかな人数ではあるけれども、その子どもたちが将来上の学校へ行つた時、「ちょっと違うぞ」ということを、小学校として出したいのですよね。

**鈴木**●「違うぞ」ということは、少し意味が違います。私たちは、ごく当たり前のことができる人間を育てたいのです。当たり前のことをするというのは、実は難しいことなんです。ただ、私がしたいのは、当たり前の教育。なにも特

殊な子どもを育てるつもりはありません。  
左巻●それはとてもよく分かります。分かるんですが、その内実がもうひとつよく分からない。

鈴木●人間として、当たり前のことができるようにする教育です。友達が悲しんでいればそれを慰め、共感できる子ども。苦しんでいる人がいれば助けてあげられる子ども。学力でいえば、当然国語や算数で求められる力を備えている子ども。そういう意味で、当たり前のことを当たり前にやりたいのです。これは、抽象的にしか言いようがないことだとは思いますが、すけれど。

それと、私は同志社はキリスト教主義というよりも新島主義の学校ではないかと思っています。キリスト教文化センターの所長として、こんなことを言っているといけないのかもしれませんが（笑）。ただし、いくら新島主義だといっても、キリスト教から離れることはできません。そのために小学校で何をやっているかといえば、たとえば毎朝の礼拝。讚美歌を歌い、聖書を読み、奨励という形でいろんな先生がお話をする。先生は全員がク

嘩をしてきなさいと。それができれば大成功です。

左巻●特殊な教育をするわけではないというお話でしたが、今の時代、今の社会で当たり前のことを追求するのは特殊ですよ。

鈴木●それはよく分かっています（笑）。

### 短期間で結果を求める 現代の社会に対して さらにきめ細かいアピールを

左巻●私が言いたいのは、同志社はこんなことをしていて面白いんだよ、日本の小学校は本当はこんなことをやった方がいいんだよという具体的なことを、何か3つ、4つでも打ち出して、世間に向けてアピールできればということです。

鈴木●私としても、小学校教育の一つの先駆けになれないかなと考えています。

石川●教育の本当の価値が見えてくるのは、やはり卒業して人生の試練に遭ったときではないかという気がしています。先ほど、小学校の間は多様な環境でお子さんを育てたいという親御さんの話があ

リスチャンではありませんが、ご自分の思いを礼拝で話していただいています。同志社小学校のコンセプトは「ワンルーム・スクール」といって、廊下もなく、学校全体が一つの大きな部屋なんです。そこで人と人との色々な「ふれあい」がある中で、キリスト教の精神や新島精神を涵養していくべきだと思っています。

自由主義については、具体的に何をしているのかを説明するのはなかなか難しいですが、そういう雰囲気は校内に醸し出されています。国際主義は、たとえば「同志社タイム」という活動をしています。これは、同志社の校友に講師をお願いして伝統文化の紹介などを行うものです。この間は能をやりました。たとえ英語ができたとしても、日本の文化を説明できないのに国際人とは言えませんから。同志社小学校では、TOEIC何点、英検何級などという英語教育を旨とするものはありません。外国人と普通に接して、普通にコミュニケーションが取ればいいと思っています。現在、英語の先生は韓国系アメリカ人、オーストラリア人、イギリス系フランス人の3名です。

りましたが、自分のクラスだけを見ていても、それなりに多様で、いろんな意味で大変です。

鈴木●私たちがやろうとしていることは、一朝一夕には結果は出てこないと思うんですけどね。1カ月や1年だけでは「何をやっているんだ」と思われる可能性は十分ありますが、10年、20年先に子

フランス系の先生は建築学をしている人で、私は子どもたちにぜひ建築の面白さや楽しさを話してほしいとお願ひしました。オーストラリアの先生には母国のことをお話ししていただく。これが真の国際性だと思うんですけどね。

森田●「自己点検評価報告書」に書かれている国際主義というのは「価値観・世界観の違いを越えたところにある普遍に気づき、偏狭なナショナルリズムを超越し、他者に対して開かれた存在たれ」とあります（笑）。だから英語のことにはひと言もふれていない。普遍に気づき、人間として共鳴し合うのが国際主義ということですね。

鈴木●この間サッカーのワールドカップで、オーストラリアと日本の試合がありましたね。オーストラリアが日本に勝った翌日、オーストラリア出身の先生に子どもたちが「おめでとう」と言ったんです。これで十分なのではないでしょうか。さすがに英語で言えるところまでは行っていないんですけど。小学校6年間の目標としては、アーモスト大学への修学旅行で現地の子どもたちと英語で喧

どもたちが大学を卒業して社会に出た時、本当の評価が与えられるのではないかと考えています。ただ同時に、そこまですなかな期待してはもらえないだろうなという気もします。

左巻●ただ、何かはつきりしたものを打ち出さないと、現状から逃げているように思われてしまいます。教育は長い目で見ないといけないというのは、これも当然のことなのですが。

鈴木●そうかもしれませんが、今の教育は現実には長い目で見てもらえないんですよ。1年で結果を求められる。当然、私たちは20年先に「素晴らしいものだ」と言ってもらえることを信じてやっているんですけど。

奥野●同志社小学校は社会に対していろんなアピールをしておられると思いますが、記者として、またOBとして見ると、もったいないと思うことの方が実は多いんです。同志社OBの記者仲間でも同じような意見がよく出るんですが、同志社小学校は意図しようがしまいが、マスコミや世間では立命館小学校と否応なしに比較されます。たとえば、私たちが仕事



体育の授業の一コマ。開始前、先生からの話に耳を傾ける生徒たち。



で使っている記事データベースでこの2校の名を入れて検索すると、立命館小学校の方が5割以上も記事が多いんですね。私が取材している時も、立命館の記事を書きながら「どうして同志社からのリリースは出てこないんだろう」と思うことが頻繁にありました。過剰なアピールは私自身も好きではありませんが、ビジネスをバリバリやっている卒業生からすると「同志社は大丈夫なのか」「PRが下手なんじゃないか」などと心配になるようです。同志社の良い点、社会的意義のある点は、どんどんアピールすべきだと思います。

**森田**●立ち上げ時のアピール不足は、私たち設置準備室の責任でした。ただ、中身のないアピールはしたくないということなのです。

**鈴木**●一般の方はどうしてもマスコミへの露出度で判断してしまうのでしょうか、果たして我々同志社が中身のないアピールをしてもいいのかということ、それは違うと思うのです。

**森田**●それに給食にしても靴にしても、マスコミには「ブランド志向」とすぐに

書きますが、実情は違うんですね。給食は当初3社が入札したうち、宝ヶ池プリンスホテルがやはり抜群においしかったし、1食600円に占める食材費が最も高かった。しかも、小学校のすぐそばにあるので何かあると素早く対応できるというメリットがあるし、マナー教室をしようとするれば、すぐにシエフが来てくださる。料理の地下はホテルで作り、ホテルの調理師が学校で仕上げるという半自校式も採用しています。

**奥野**●学校の中でおいしい匂いがするところが大事と聞いています。

**森田**●その通りです。ブランド志向でプリンスホテルにしたわけではないのです。当初マスコミから取材の申し入れがあった際、「ホテル給食という観点で取材されるのでしたらお断りします」と申しあげました。一澤帆布のカバンにしても、重くて何万円もする皮のランドセルに比べれば、軽くて丈夫で安いというメリットがあります。長距離通学をする生徒に重い皮のカバンを持たせる理由はどこにもない。セキユリティナー面からも、ひと目見れば同志社小学校の生徒である



一澤帆布製の通学カバン

ことがすぐに分かるカバンでない。そして経済学部の卒業生である一澤信三郎氏だからこそ、心を込めて作ってくださるであろうと。校歌にしても作詞を谷川俊太郎さん、作曲を大中恩さんに依頼したのも、谷川さんのお母様は同志社女学校のご出身ですし、大中さんのお父様も同志社出身だからです。有名な方だからお願いしたのではなく、同志社を知っている人に作って欲しいという気持ちがあったからです。

**鈴木**●谷川さんも、本当に心を込めて書いてくださった。

**森田**●そういうことを新聞に書いてくださいね(笑)。

**奥野**●ブランド志向の話は新聞記者独特

のシニカルな視点から書いたものと思いますが、皮よりも軽くて安いカバンであるとか、そういうことこそアピールして欲しいのです。取材に来た記者に立ち話のようにお話しされるだけではなく、プレスリリースとして印刷し、記者会見を開いて配るくらいまでされた方が、PRという意味ではいいかと。立命館さんはその点、非常に丁寧ですよ(笑)。

**司会**●僕は京都で生まれて公立小学校に通ったものだから、同志社といえはとうしても「お坊ちゃん」なんです。しかし、逆にそのブランドイメージを使うこともいいと思います。何も控えめにするのではなく、そのイメージをうまくプレゼンテーションすればいいのではと。**鈴木**●そうしたいんですけれど、某小学校がいつも先手を打ってこられるので、一般の方の目には同志社が後追いでいるように映ってしまうようです(笑)。

## 学内諸学校の連携

**司会**●小中高と大学の連携という視点か

らは何かございますか。

**左巻**●私は学校法人同志社に来て、法人内の連携がないように感じました。同志社香里の副校長が来られて、小学校をつくるから何かの時は力を貸してくださいと言われたのですが、結局、女子大には何もお声がかかりませんでした。

**鈴木**●私が最近よく言っているのは、小学校と中学校、中学校と高校との間であるなことを話し合いますよという事です。中学も高校も長い歴史を持つ学校ですから、それに根づいた教育方針があると思います。中学校からは小学校にこんな教育をして欲しいという要望があるでしょうし、小学校からも中学に対しても要求が出てくるでしょう。先日、同じ敷地に高校と小学校があるので一度交流しましょうと提案したところです。高校の先生に小学校を見学しに来ていただき、両校の先生同士に顔見知りになっていただく。こういう視点が、今までの同志社には欠けていたと思います。ね。独立採算制にも良い点がありますが、この点は悪いところであると思います。お互いが考えていることを話し合うこと

で言い合いになることもあるでしょうが、それでいいんですよ。その上で落としどころを見つければいい。同じ法人内の学校なのですから。

**左巻**●私の専門の理科教育で言いますと、学内校の理科の先生方の大半は、すぐ近くにいる私たちの研究会には入っておられないんです。もつと外へ出て勉強すればいいのにも思いますね。同志社小学校の先生方も外に出て、地道に良い教育をしているような本物の先生を探して、ふれて欲しい。使い捨てのようにされて、その上で意欲をもって生き残ったタフな先生がたくさんいる学校もある中で、同志社を見てみると教員もお坊ちゃん、お嬢ちゃんが多いと感じます。プラス・マイナス両方あれど、それが同志社の今までの文化だったのかもしれないが。

**大塚**●私より上の年代の先生は、わりあい外部や民間の研究会に出ているようですが、若い先生では減ってきましたね。時間的余裕がないのでしょうか。外部の刺激を取り込んだ結果、学校の内部が多様化すると思いますが。

鈴木●大学でも、そういう意欲をもった学生が減りました。

大塚●それは悲しむべき傾向ですね。官製の研究会などはあまり役に立たないように思いますが、どんな外部に出ていることは非常に大事だと思います。それから同志社では、生徒の面倒をよく見て、生徒に丁寧に対応するということを大切にしたいと思います。そのためには生徒が自分を語る言葉を持たないと、こちらは対応できません。文部科学省が今度の学習指導要領で「ことば」ということをよく言っていますね。小学生でも、自分の体験に言葉に乗せられるというのは大事なことです。自分の苦悩、喜びを言葉にして、それによってコミュニケーションできるようにするという教育が非常に大事なのです。

同志社高校では、不登校の生徒を入学の時点で排除していませんが、メンタルな病を抱える生徒は増える傾向にあります。たいていは治るのですが、その時に自分の苦悩を言葉にして伝えることが非常に大切です。いま苦しんでいる子たちは、その苦しみが言葉にならないんです



前列左から、大塚高等学校長、石川教諭、鈴木小学校校長  
後列左から、水谷教授、奥野記者、左巻教授、森田大学企画部長

ね。苦しみは語られれば、たぶん半分くらいは解決する。同志社が何か特長ある教育をするのだとしたら、一つはそういう「言葉を大事にする教育」ではないでしょうか。だから同志社には、家族で複数世代にわたって入学してくるケースが多いのではとも思っています。

### 同志社小学校の課題

司会●最後に同志社小学校の現状、課題をお聞かせください。まだ開校して2カ月ですが、実際に出発して感じておられることをお願いします。

左巻●授業が始まってまだ2カ月ですが、当然の成り行きとも思えますが、授業の進め方でとまどいがちな先生もおられると聞いています。

鈴木●始まって間もないので、事務体制も含めて十分な体制ができていくわけではなく、日々時間に追われている部分が多分にあることは確かだと思います。

森田●同志社は、強力なリーダーシップを持つ人がぐいぐい引っ張っていくという気風がまるでない学園です。ですから、

そういう強力なリーダーを期待して同志社小学校に来た人は、ちょっと戸惑うかもしれません。

鈴木●私はいつも言っているんですが、分かなければ聞いて欲しいし、意見があったらどんな発言して欲しいですね。

左巻●ただ私が思うには、今の20代、30代の若い教師は教育というものがまだよく分かっていないんですよ。だから同志社小学校に若い先生が多いとなると、教師集団としては弱いのではないのでしょうか。集団として年齢のバランスも重要だと思ふのですが。

鈴木●有期教諭もいることなので、確かに若い先生は多いです。その人たちは副担任として勉強してもらっているところ、ある程度力がついてきたら専任に上がっていただくよう考えています。

森田●説明いたしますと、同志社小学校は新しい教員システムを導入しています。3年を上限として有期契約をして、その上に通常の教諭がいて、その上に主事教諭がいる。なぜ有期教諭を置いたかといいますと、新卒の人をすぐに専任で

採用するのは大きなりスクがあるからです。本人が初等教育に向いているかどうか分かりませんので、最初の2、3年はじっくり見させていただきたい。と同時に、その間にベテランの先生からいろいろ

なことを学んで伸びてほしい。こういう採用のやり方は、今後全国の小学校で導入されていくのではないのでしょうか。やはり小学校にとって最も大事なのは教諭なんです。カリキュラムも確かに大事ですが、いかに子どもたちと向き合える良い先生を集められるか。これがすべてに近いと思っています。

鈴木●今は先生方に余裕がない。若くて元気がいいのですが、若いだけに、一杯一杯やっておられる。昼も給食を子どもたちと一緒に取りますし、一日のほとんどを教室で過ごしていらつしやいます。

若い先生方の毎日が非常にハードであるということも、一つの課題でしょう。年配の先生方は、時間配分をバランスよくやっておられます。それと、先生方には最初に「子どもたちと向き合ってください」とお願いしましたが、大半の先生はそうしてくださっているけれども、まだうまく把握されていない先生も中には見受けられます。あとは先ほど申しあげたような、ソフト面での仕掛け。これらが、さしあたって見えてきている課題です。

司会●若い先生が多いというのは、僕はある意味、楽しみかなという気がします。これから良い体制を構築していく可能性に期待したい。最初から色つきで型にはまっているのではなくてね。それから私は以前、中高大連携委員をしていましたが、将来は中学も岩倉に移転することで、今後はぜひ、小学校から高校までの三者連携をうまく機能させていただきたいと考えています。

鈴木●この間、宝ヶ池で高校生が横断歩道を渡らずに道路を横切つて来ました。そのとき小学生たちが「お兄ちゃんたち、あんなところを渡っていいの?」と言った声が彼らに聞こえたんでしょうね。恥ずかしくなったのか、逃げていきました(笑)。こういう効果も出てくるはずですね。もちろん高校生が小学生を守つてくれることもあるでしょう。一緒に学園にいるのですから、これが本当だと思います。子どもたちの間には、そういう交流や結びつきも期待したいものです。

司会●本日はありがとうございました。  
(2006年6月15日有終館第1会議室)